

扶桑皇統記圖會

前編
四

2472
1

扶桑皇統記圖會前編卷之四目錄

鑄大佛銅像

良辨僧正之傳

良辨僧正幼少大就驚小攫つる圖

近易石山寺建立

從奧易始獻黃金條

石山小良辨釣る翁小あし圖

聖武天皇崩御

惠美押勝誇君寵事

押勝君寵小誇王百官有司と護る圖

感夢想太后儲浴室

改鑄新錢條

弓削道鏡朝恩と蒙る禮讓を廢と圖

弓削道鏡乱宮中

惠美押勝滅亡の事

新帝淡路於謫所崩

神靈路上救急難忠臣夏

道鏡の内命を受清磨を害せんとて暴天雷發る圖

光仁天皇御即位

道鏡於配所餓死條

目錄終

扶桑皇統記圖會前編卷之四

浪華 好華堂野亭參考

鑄大佛銅像

良辨僧正之傳

聖武天皇深く三宮小飯依

の己小諸國小國分寺と建の其餘寺院

伽藍を多く御建立ありける

猶又盧舍那佛の銅像を造ると思ひ

これとも是ハ莫大の國財を費して義あり

如何有るを。御飯依僧良辨

僧正此義を問ひける

良辨謹んで勅答されける。それ佛像を造り

るハ其功德廣大无边

て四海太平の御祈り。何より是ハ勝りいふ。君

費財を厭ひわが普く天下の人民ハ

一紙半錢の寄附を勸めざる。如

是れを多く貶聚り佛像速く成就し

佛像供養ハ御一人の御力より

他力の信絶こそ如来の御本願ハ

叶ひぬ。勸めざるを。御后光明皇后



より。も。も。御勸め有る。帝。遂。小。睿。慮。を。定。め。人。行。基。僧。正。と。以。て。諸。國。を。勸。進。せ。せ。其。勸。進。帖。の。文。曰。

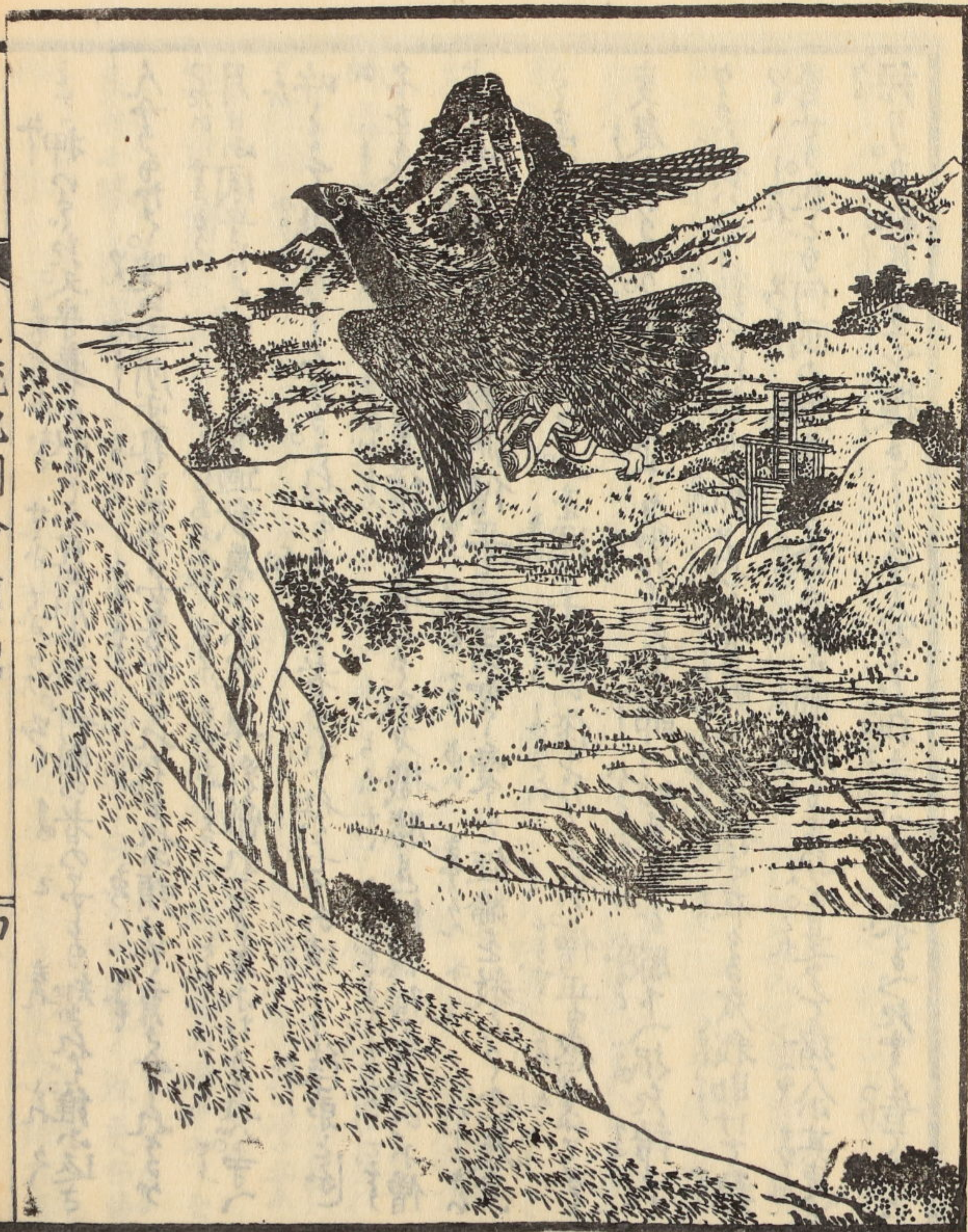
朕。薄。德。と。以。て。恭。く。大。位。を。承。志。し。兼。濟。を。存。し。勤。め。人。物。を。撫。率。土。の。濱。已。小。仁。恕。小。惠。と。し。而。も。普。天。の。下。い。も。法。恩。を。給。ふ。誠。小。三。宝。の。靈。威。小。頼。て。乾。坤。相。恭。小。万。代。の。福。業。を。修。成。く。栄。人。事。と。欲。と。興。小。菩。薩。の。大。願。と。發。と。盧。舍。那。佛。金。銅。の。像。一。軀。を。造。り。奉。り。利。益。を。蒙。り。冥。福。を。祈。ん。と。欲。と。此。事。小。依。て。敢。て。百。姓。を。侵。し。擾。と。強。て。聚。斂。せ。む。る。更。勿。き。遠。近。小。朕。が。意。せ。公。告。知。し。一。針。一。草。の。衆。力。を。以。て。伽。羅。佛。像。を。造。立。し。万。民。と。共。小。佛。果。と。受。め。る。者。也。

大僧正行基右の勸進文を捧げて。諸國の國司守護人より下市農夫

小。い。も。も。普。く。勸。進。せ。れ。と。ま。我。も。と。小。應。じ。て。施。入。し。る。程。小。莫。大。の。財。宝。聚。り。多。く。帝。斜。め。と。歡。喜。し。の。御。庫。小。積。所。乃。金。銀。を。令。て。大。佛。の。銅。像。と。鑄。立。し。め。伽。羅。を。江。州。甲。賀。郡。小。建。立。さ。せ。の。ひ。き。り。是。行。基。僧。正。の。勸。進。の。力。小。依。と。ま。た。り。と。し。も。一。只。良。年。僧。正。の。帝。小。他。力。信。施。の。功。德。を。勸。め。ま。り。功。小。依。り。抑。良。年。僧。正。と。も。江。州。志。賀。郡。の。農。民。の。子。け。り。又。八。當。才。の。比。外。後。母。の。手。小。て。育。れ。る。小。三。才。乃。其。母。我。兒。を。懷。た。て。外。面。へ。出。來。の。葉。と。摘。多。る。子。と。抱。へ。て。自。由。あ。る。さ。る。小。稚。子。と。草。上。小。あ。り。置。己。が。隨。意。小。這。遊。む。せ。其。身。小。來。の。葉。と。摘。と。り。て。在。る。小。忽。比。良。が。獄。の。方。り。年。歷。大。鷲。一。羽。飛。き。り。て。真。一。文。字。小。舞。下。り。草。の。上。を。這。回。り。花。を。摘。と。り。て。余。念。なく。遊。び。居。る。稚。子。と。は。と。執。攫。ひ。て。雲。井。遙。小。飛。去。る。母。鷲。の。羽。音。小。發。た。り。顧。れ。ば。早。我。兒。と。執。と。

遙々の天を翔り往ふ。何久以て驚くもあらず。叫び我をすれて
 田も畦も言を追行れども何ぞ其終わんや。早就鳥の姿ゆえんを成
 れどもあつて叫び泣く。又起つ其方乃天をあらわし。魂あ人
 り。是より心乱れて發狂となり。我屋の中を立つ。我子返せと戻せ
 と叫び泣く。其所もあらず。憧れ行きて哀れなり。然るに平城乃東大
 寺。義淵僧正とて道德勝る。聖僧あり。心願の妻あり。日く春日
 明神へ参詣せし。或日例の如く明神へ参詣せんとて。徒弟若黨あ
 を従へ。社参あり。帰路春野を通る。年徑一杉の樹の梢小兒
 の啼声きこえたる。僧正訝りて立停り。杉樹の梢を見れば。一羽の大鷲
 梢の枝に留り。人の小兒を抱きて。兒を喰ふ。此角とよせて。列さる。寄
 てハ嘴と引て在る。僧正小兒を驚かし。喰ふ。更と憐れ。梢に向ひ印を

結びて真言を唱られ。就鳥は是れ恐る。兒を捨置て。飛去る。僧正
 肩小掛する。錦の九条袈裟をきて。徒弟們小四隅を持せて。廣げ愛せ。諸
 再び梢に向ひ真言を唱へ。祈念せられ。忽ち小兒の梢をす。れて袈裟を
 上へ落し下り。聲をきいて啼く。僧正寄て見らる。二枚針の玉の如き男
 子なり。自ら己小兒を抱き揚らる。即時啼止。僧正の負を見て。完示
 くと微笑する。僧正哀憐の心。弥増。何國の誰か。子う。知れども。就鳥を
 と攫ふ。其父母を悲し。尋搜する。國所を尋ひ。返り得ず。
 東大寺に將て歸り。先小兒の衣服小出所の書記あり。有と搜し。之
 る。國所を書き。物もち。肌小掛させ。守囊小。寸八歩の觀音の木像有。れ
 る。僧正初て心付。彼惡鳥。此小兒を喰ふ。此角を寄る。敢て食ひ得ざ。ハ
 此佛像有。ゆへに。今ふ始め。更わ。觀音菩薩の利益を。尊く。是



良母僧正切
大就撰
母れて遂に
又往方て狂
氣の中

とて押ひきた。又中裏小収と小見の肌小掛何國の者の子とも知れぬ維多返さ
んやうもた。院の御所小乳汁のある女房有られむ。それ預けて育させられむが
つた。月日小閑守り。春過秋暮て小見ハ早乳離れも年ふりりなれ。寺へ
呼とて艱育せられむ。それ尋る者もふくれむ。七の頃より徒弟と名
名を良弁と呼て手跡素績をせられむ。才機勝是記憶強。自余の小僧
より遙小優りなれ。義淵僧正所生の如く愛て経綸を教らる。一度更
なる字再び思ふ更なり。一を聞て十と知の俊なりなれ。僧正も感嘆せられ
更度あり。斯て良弁十才ふなりなれ。師の坊良弁を膝下へ招れ結ん
々るハ你ハ三才の頃就鳥小机よれて春日野の松梢小在る。我助けて艱
育せり。然とも何國の維多返も。父母の名も國所もあれ。是より諸人其更と
結り。就鳥小子と攫き。一人あむ我寺。尋の来るべし。告てよと

頼り。われと今以て尋の来る者も。これ你が父母の生死定むる。是より前
生の宿業小因と。これ你が守裏の觀音の尊像を父母の記念と思ひ堅
固小佛道修行。父母の二世安樂と祈り。且一切衆生を化度する程の僧と
あれ。これ懇ろ小鏡示され。良弁ハ推心小師の坊の高恩を感じ。又父母の
更と思ひて涙を流し。仰のどく。就鳥の甜食と成ひ。此身小助け。上
より上此年来御艱育中給り。御高恩の世の報に。此身小
師匠とも父母とも崇め仕へ。下より是より益志と。厲小寢食と。忘れ
て経綸小眼と。睡一切磋琢磨の功を積む。程小年長の。小應小字業
追く進。緒経の奥音究む。これ又限も。若年より平城七太の僧中。わてを
良弁小勝る博識かと賞美せられ。小發達。諸人の用い重く殊更布田
那小勝るむ。これ就鳥小禁裡院中棋家。あつた。良弁と諸相有

て説法させ御聴聞あり。斯て良弁三十才あり。年師の房義淵僧
正遷化せられ。其終焉の前良弁を枕辺に招かれ。我己小僧終
の期来まり。你の學道成就と我跡を踐み足り。念佛道修行心と屬し
万代まで名と残を知識と成よと。數の遺物を与られ。良弁頂戴と
涙を流し。拙僧幼稚の時。惡鳥の餌とあり。と。師の御情。て危れ。金と
助け。それより。以来。御養育。預り。は。鴻恩あり。金。て。八須彌山。も。尚。低く
滄溟海。も。猶。浅く。父。も。母。も。賴。ま。り。師。小。方。今。の。御恩。を。報。し。ま。さ。ず
別。ま。わ。る。と。更。の。悲。し。き。と。て。涕。泣。の。淚。衣。の。袖。を。浸。し。歎。れ。れ。れ。義。門
僧。正。是。を。練。り。會。者。定。離。の。金。言。維。久。免。る。な。れ。今。別。る。と。も。終。小。西。方。無
為。の。都。り。て。永。く。交。り。成。結。ん。と。其。よ。一。言。の。發。せ。れ。ど。端。座。結。印。
て。千。千。陀。羅。尼。を。唱。へ。て。遂。に。其。夜。の。曉。小。眠。る。と。遷。化。せ。れ。り。良。弁。を

ち。の。妻。の。弟。子。僧。哀。淚。衣。の。袖。を。浸。り。か。が。葬。送。の。管。嚴。ふ。て。茶
毗。の。煙。と。ど。り。ふ。る。と。れ。より。良。弁。師。の。坊。の。跡。で。繼。聖。武。天。皇。の。御。祈。の。師。
仰。ぐ。僧。正。の。官。任。せ。れ。土。天。子。より。下。万。民。も。小。尊。ま。り。身。と。お。れ。り。却。説
良。弁。僧。正。の。母。子。と。就。鳥。ふ。と。れ。より。我。狂。と。な。り。現。心。も。た。我。子。返。せ。見。を
度。せ。と。呼。り。お。行。た。身。ハ。非。人。と。零。落。て。冬。ハ。寒。夜。の。雪。小。凍。夏。ハ。三。伏。の。暑。小
蒸。ま。か。る。日。本。の。中。の。高。山。難。所。を。尋。搜。さ。ぬ。限。も。な。く。已。ふ。三。十。年。の。春。秋。と。夢
現。も。た。く。過。し。迷。ひ。回。り。て。山。背。國。徒。の。と。り。来。り。多。く。忽。然。と。て。夢。の。覺。る
と。狂。氣。治。り。正。氣。付。て。不。斗。心。お。思。ひ。多。く。我。身。就。鳥。小。子。と。取。ま。り。より。我。己
我。身。何。國。を。心。と。往。り。や。更。小。覺。と。驚。小。取。ま。り。我。子。の。生。て。現。世。亦。在。る。と
や。り。か。る。或。此。年。月。尋。の。迷。ひ。思。ふ。と。諸。も。れ。より。幾。年。と。往。り。を。入。迎
身。を。顧。み。海。州。の。と。れ。破。衣。を。纏。ひ。水。鏡。小。写。し。と。面。を。と。れ。と。頭。の。髪。も。雪

の色と変りて脱減面皴の波をたも。齒もろく。拔落て向齒のともふ
残り。我まが。我もあ。ぬ面貌あれ。二向と悩む。せむ。古郷のあじ
く渡す。お。頼。船の便を。舳の隅。蹲。居。乗。合。の
衆人の縁結。東大寺の良弁僧正。當世稀。大徳。在
ま。彼僧正。二才の時。就鳥。擲。春。山。の。梢。在。人。と。や。織
小。天。降。し。聖。人。と。謂。し。帝。の。御。祈。の。師。と。仰。が。れ。院。の。御。所
撰。家。方。も。尊。敬。あ。り。て。平。城。七。大。寺。の。中。の。碩。学。と。稱。せ。れ。る。と。あ。ん。と。結
合。る。ふ。と。老。女。は。と。想。る。諸。も。世。上。の。似。る。更。も。有。る。ふ。我。子。も
二。才。の。と。驚。小。取。ま。る。其。僧。正。が。驚。き。し。我。見。て。は。あ。れ。や。と。疑
ひ。猶。も。精。く。尋。問。な。す。内。船。の。早。岸。の。着。で。己。が。隨。意。立。別。行。去
る。ゆ。老。女。の。本。意。な。く。思。ひ。あ。る。此。六。東。大。寺。往。て。金。所。あ。る。僧。正。の

来歴を尋問。志賀も帰ら。其より平城行。東大寺。到。り。て。小。門
堀。巍。く。て。玄。關。の。幕。を。ち。翠。簾。を。う。け。五。七。人。の。武。士。嚴。重。小
並。居。れ。中。寄。附。る。も。あ。る。也。何。も。良。弁。僧。正。の。御。息。せ。と
一。月。見。し。て。平。城。の。町。家。に。食。と。日。東。大。寺。の。辺。に。宿。ひ。弟
三。日。良。弁。僧。正。來。興。小。駕。從。者。大。勢。小。前。後。を。守。せ。て。東。大。寺。と。出。れ
る。小。乘。興。の。戸。開。て。有。る。老。女。遙。小。所。を。隔。れ。僧。正。の。横。負。を。こ。る。小
何。と。中。雅。息。小。覺。あ。る。中。小。思。ふ。駢。と。我。兄。と。も。知。る。身。ハ。非。人。と。零。落
更。あ。れ。討。を。う。け。ん。中。も。あ。何。せん。思。ふ。小。乘。興。を。早。春。日。の。社。乃。方
行。過。る。老。女。大。小。望。を。失。ひ。沈。然。と。其。後。と。見。送。り。て。在。る。小。折。も。東
大。寺。の。寺。中。より。一。人。の。僧。出。來。り。た。是。幸。ひ。と。寄。て。詞。を。う。け。此。般。小。見。苦
れ。姿。あ。て。中。の。悽。り。多。く。と。あ。る。御。出。家。と。思。け。御。尋。や。更。の。い

御座届めりて生ぜし御恩を忘るゝとせよ哀れげ言々る小僧心の
中ふ是合カみ我を思ふ人と思ふも流石佛徒の憐れ深くを留り。我小尋
と何更うきやれ。此所へ御門前より人の往及もまげ。尋る更あふ我房
て歩み。我小從て来まよと。有分の寺へ歸り。老女と白砂へ呼入て諸尋問
と如何ある義と問ふ。老女答て。え此身ハ志賀の里小住し者あて。先
年二才小成り男子と就鳥小取まよと。狂氣して凡三十年許緒國を尋る途
ひひひ。先頃淀の渡りて不斗狂氣をて正氣つれひひ。古郷の志賀へ歸
らん。渡舟小便ををて乗ひひ。乗合の人の物語。東大寺の良弁僧正を
二才のと就鳥小撮られ杉の梢より落りひ。御身なりとせられを。妻が
兒も御在やんと思ひ其ま。此平城へま。毎日東大寺の御門前へ徘徊
し。今日僧正の御息をよとめ。拜し。何とや取ま。我兒の稚息小

似る所有す。小貴い。御覽のぞ見苦。零落し。此身もを更問も人
るも叶ふ。思ひ煩ひ。何年僧の御情を以て此條の更と僧正言と
給るす。たや。眞実。おあつと涙ととも。頼るも小僧。彼僧。お詮。其
僧正の御身土も。你的物語と彷彿。我も世上似る更。お言。一
你的其風。鉢ふれ。我。言。上。も。憚。お。あ。と。と。你的。口。より。直。言。上。
る更。猶。以て。叶。ふ。と。依。て。我。の。方。便。を。教。は。る。を。尊。僧。正。頃。日。御。祈。願。
あつ。公。の。御。用。あ。れ。只。必。と。春。日。明。神。御。参。詣。し。下。向。六。二。月。堂。乃。前。
たる。年。徑。る。杉。樹。の。下。で。乘。輿。を。下。り。ひ。杉。樹。小。向。ひ。十。念。を。唱。り。右。の。杉。
の。樹。ハ。僧。正。往。昔。就。鳥。小。取。ま。ひ。砌。り。梢。小。通。り。ひ。樹。小。あ。へ。人。号。け。て
良。弁。杉。と。称。せ。り。拙。僧。你。が。就。鳥。小。兒。を。取。ま。三。十。年。が。間。緒。國。を。尋。る。間。
次。弟。を。書。記。て。遣。は。る。を。同。と。の。書。と。の。と。彼。良。弁。杉。小。貼。み。其。辺。小。忍。

居て窺ひひひひを必定僧正の御み目めふと云ふ。你を召めきて巨細を御尋もとあるべし。
其時そのとき詳こまふ右の次第しだいと言いふられよと。即時そのとき小老せうらうが語かたりもむれを。後名のちのな
交まじりあ書しよ記きてよめれた。老女らうにょ大だい悦えつびの件けんの書物しよぶつを數度かずどや頂うへ丸まる厚あつく礼謝れいしゃ
を述つづて立出たちで。教しよのごく良弁りやうべん杉すぎの幹かん貼はちき其その辺へりあ在ありてどう規きひ居ゐるを
其その翌あつち日ひ良弁りやうべん僧正そうじやう六例りくれいのごく乘輿のりもの小せう駕か從者じゆじやうと召連めしづて春日かうすか明神みやじん參詣さんぎ
下げ向むかひ良弁りやうべん杉すぎの下したへつ興きやうより下くだ。杉すぎ向むかひ陀羅尼だらにを誦よみ念と唱となえ
々々ささ小幹こかん一紙いしの書記しよきを貼はちき。僧正そうじやう異い々さ徒弟でい小捲まきりとを採とりて見
らるを。近州きんしゆ志賀しがの里の者ものおて三十年さんじゆねん以前いぜんニをふたる男子なんしと鷺さぎふ取とりてこれ
より此年月このとしげ日本にっぽん國中くわうちうと尋もとめる。東大寺とうだいじの良弁りやうべん僧正そうじやうも御幼少ごせうせうの幼せう鷺さぎふ
とれをひき。此杉このすぎの梢こぎ小居せうゐりし由人ゆじんの物語ものごおまきよく相あひ似おるを更さらあらわる。稽かりく
問となりしとハ思おもひしと高貴かうきの御身ごみ小直しき小尋もと問となりしとハ思おもひしと。此書記このしよきを御

目ふうけんゝ貼置い也と書う。良弁僧正心徹。若黨小向此書を貼
 け者此辺在を。尋て連きと命する。若黨領堂。其辺を尋
 一人の非人の姥此方を眺め居。其余人もあう。老女向ひ你。杉
 木小書記を貼。者と不知。問老女喜。杉の木小書記を貼。妻
 みて。答。若黨與を醒。面りて其由。僧正へ上。其音
 を是へ呼寄。近く呼寄させ。見ら。小達の髪芒を束。

乱。身破裂衣。綴衣と纏ひ。見苦。げある。姥地上。蹲り居。

僧正老女。向此書記を杉の木。貼。你たり。問。老女。頭。

上。小。妻。て。答。僧正。て。你。我。幼少の。郎。就。驚。此。

杉の。梢。小。在。師の。御。房の。御。物。語。て。世。も。世。小。似。る。更。も。あ。

ひ。你。が。驚。小。取。れ。兒。小。と。如何。なる。證。據。や。ある。と。問。小。老。女。答。て。貧。れ。身。

ていへ。我兒お著せし御衣を綴り合せし針目衣にて肌ふ妻が縫し染絹の守
囊ふ夫の念に佛ある一す八歩の觀音菩薩の像を納て掛させられ其餘ふ
證とを布の品ゆいむと云ふといふ。我は僧正大い御喜悅あり。それと
懺むる證迹たれ其守囊と見ふ非るうといふ首掛れる錦の守囊より
又二つの守囊と採出して見せられ。老女手取てお發た見ると主女が手縫
みせし守囊お経かけのいといふ。僧正も且悦び且哀む。偕は多年尋の慕ひ
我母おて在るう。我いふ。東西を弁する時驚ふといふ。己お惡鳥乃
餌とあり。師の御房の惠みて危た一命と助う。刺し師匠の慈悲言ふ
依て成長する。小付。実の父母現せ在る。其所在我知りぬ。春日明神へ
祈願する。法教の違ある。社参。下旬。度。此杉の下。主寄。陀羅尼
を誦し十念と唱る。父母存命ある。息災延命の祈禱の。め。う。死没の

い。おむ。後生善所の為なり。世上の人を皆父母と孝親を尽く。ある。う。良
弁。如何あれ。幼少。例稀。大難。遭。適。師匠の慈悲心あり。死。た
一命と助けられ。せ。父母の名所を。知。れ。御在家と尋ね。便。わ。く
き。慈母の三十余年の永れ年月。緒。深。山。荒野を。尋。ね。迷。ひ。餓。凍。ひ
い。成。も。ま。我の。飽。す。不。食。ひ。温。衣。て。先。陰。を。送。り。不。孝。の。程。を。悲
くれ。れ。神佛お捨られ。春日明神の御利生三密の冥助あり。海中の優
曇華。小。勝。実。母。小。廻。り。會。へ。添。け。お。よ。春日の宮社を。遙。拜。歡。喜
ある。更。限。り。老。母。と。乘。輿。お。駕。て。東。大。寺。歸。り。沐浴。させ。衣服。を。著。更
く。一。室。お。住。し。朝夕孝親を。尽。く。せ。世。人。皆。其。奇。縁。を。感。ず。老
母。八。多。年。の。望。み。足。て。昨。鳥。の。飢。寒。小。相。及。錦。衣。王。食。小。飽。影。響。を。以。て。佛。門。お。入
且。夕。續。經。念。佛。八十。才。で。存。生。て。終。小。往生の素懷を。遂。げ。良。弁。僧

正八母公の靈と社の神小鎮祭リ。子安明神と号し。朝夕泰結ありと云
其約今猶南都大佛の乾の隅小兒の諸病を祈すも必ず驗有と云

近州石山寺建立

從奧州始献黄金條

却説大佛の銅像成就し。聖武天皇御歡喜斜あり。然れども佛跡
小押をた伯無リ。此義如何を。群臣と集て御評議ある。吾朝
いよ黄金を産する地なれ。世上有所の金錢を聚め。伯小押て押入
別手手段。唐土より此時代。人々多き。左ありて世上の財減。て
万民の融通を妨る。宜しき。猶百般評議の上。和州金峰山。金を
産する山なり。金の御藏とも稱され。彼山は堀せ。自金を得
更りや。らんと。一は奏聞。や。天皇実。思召。先金峰山の藏
王推現。其由を告。然。后山を堀。む。と。良弁僧正を勅使。

て金峰山。赴。良弁僧正勅詔を奉。芳野へ。藏王堂へ泰結。と
勅宣。續山を堀て金と求む。告。祈念。其夜。堂内。通夜。法絶。の。延
成。續。彌。頻。小。睡眠。寝。間。睡。藏王推現形
と現。枕頭。小。良弁。告。今般帝盧遮那佛の銅像と造り。ひ
其。宿。用。ひ。當山の金。堀。せん。の。睿慮。宜。我山の金。い。堀
取。ん。時。節。来。未。世。自。金。の。出。期。有。但。江州勢田
の。郷。小。觀音。有。縁の。靈。場。彼。所。一。字の。堂。金。と。建。如。意。輪。觀音。の。像
成。作。て。安。置。て。黄金。と。祈。求。む。遠。く。倭。國。の中。小。黄金。と。産。る。地。出
来。し。金。と。献。む。人。有。て。宿。十。小。調。此。上。と。奏。聞。と。告。と。見。て。夢。覺
る。良弁。奇。異。の。思。ひ。を。夢。想。小。任。て。芳。野。と。都。歸。り。て。推。現。の。御。告。と
帝。へ。奏。聞。せ。れ。近。江。國。勢。田。の。郷。小。觀音。靈。場。を。見。て。觀音。堂。を。建



比良明神の化身



良弁僧正
釣るる羽あり
音大士と勸請
とくん地の
と稗の

良弁僧正

リ黄金の出る地を祈るなり。是を良弁の僧といふ。良弁僧正の勅
命を以て江明へ赴た。其田の郷にありて何所か觀音の靈場なるを求め。東南
北を徘徊し。ある山中へ登りて見ると。奇石怪石。田畠として在る。仙境
の如くあれど。此所を觀音の靈場と云ふ。一山を見廻られ。山中一流の清
水あり。其汀の岩に腰かけ。釣を垂る翁あり。僧正を見。釣をけ。如
何良弁我此所を在て你を待更久し。曰知己の言を聞。僧正心孩た。是
凡余あをと神仙か。やと思ひ進み寄て拜をふ。拙僧い。仙翁小相見。更
ある名を知。一御身何人にて在。やと問。老翁微笑し。你あまや我
と。是比良明神なり。此山と觀音有縁の靈地なり。你此地の堂宇を建て。觀音
を安置し。丹青を凝て祈る。あま。求る所の黄金必と東國より出。王家へ獻
む。又此池の觀音の功德水と湛。これを末代まで衆生の疫病と救ふ。業水

より勤め。と教示のひ。念う神風に乗。比良の嶽の方へ飛去。ひ。良弁僧
正感涙。と。小御後を伏拜。急た都へ歸り。比良明神の御教示。依て觀
音の靈地を尋得。義を奏。やされ。帝睿感。工匠を命じて彼
所小佛堂を建。め。良弁僧正。佛師小女。て如意輪觀音の像と刻。其
腹内は彼父母の紀念の觀音の像。八歩を納め。羽の腰け。山石と基座。とて堂内
小安置せ。今。の石山寺是なり。斯く佛堂本尊。と成就。され。良弁僧
正。佛前小奉。毫。て。千手陀羅尼。普門品を讀。心。宿代の金と得。さ
せ。と。細祈。せ。る。小靈驗。堂。天平十六年。奥州の國司百濟王敬福
百餘國より日本へ渡り。と。國小田郡より始。黄金を掘出。煉金。二万三千六百兩を
奥州の國司に。人。都へ獻。是。日本小金と産。と。始。聖武天皇御欣悦。限り。是。偏
小藏王推現の靈告。石山寺の觀音の利益。と。造。せ。盧遮那佛の

功德小所なりとて、三宮御飯依深く、百濟王敬福、大官位を昇進させ、
祿を増加し、良弁僧正の賞物と給ひたり。大伴家持、倭國の黄
金の始て出、更を税し、なりてよめる。和哥小曰

とめら、たの御代さへんと東ある陸奥山の黄金をふさぐ、
斯く大佛の宿綱ひしを佛跡の押江洲紫香樂郡の大伽羅と建、之と安
置し、の寺と申賀寺と号け、肉眼供養、嚴重執行ひ、の帝群臣と將て御
幸なり、の近國遠國の貴賤老若群集、と感涙を流さ、と(者)
日二十年太上天皇元正天皇山明御より、の御尊殿と大和國添上郡奈保
山の陵の葬りなり、の年聖武天皇室位を皇太子の禪らせ、此君を
四十六代孝謙天皇とよなる、即ち女帝とて、御禪ハ阿闍内親王高野姫とせ
し。聖武天皇の皇女、御母、光明皇后なり。天平十年、皇太子を立せ、今年

十善の帝位、即ち天平二十一年改元あり、天平勝寶元年、の先帝、武
太上天皇の尊号と奉り、の年二月、行基僧正入寂あり、
の御悼惜、の年四月、紫香樂郡甲賀寺の大佛を平城の東大寺の
曳移し、の伽羅羅建、の始、聖武天皇奉り、の御衣の御袖、衣表、の
の檀を築、初、のの程の御更、あれ、百工精力を励、の今年大佛殿成
就し、諸を佛像と移し、の、斯く入佛供養の儀式、と嚴重執行せ
し。太上天皇、光明皇后及び百官、於幸て東大寺、の御幸、のの橘諸兄、仰
せ、余文を作らせ、の先年佛徳、の因、奥洲より始て黄金と出せ、其御
歡喜と佛前、の、其文、曰

敬白

三寶之奴奉奏、盧遮那像前、此大倭國者、天地開闢以來

雖有黃金自入國獻之未有斯地時國中東方陸奥國主
從五位上百濟王敬福自部内小田郡獻黃金此驚悅

佛慈賜焉恐戴持率百官奉禮拜焉

十善万乘の君之佛像を崇めしめて三宮の奴と辨り稱し之程の御更
も増て況や供奉の公卿末の身壯れ輩猶以て恭敬禮拜し各佛
名を稱して尊とす此日の導師の菩提僧正とて南天竺より来朝せ導
れ名僧なり寺中小相結し五千人の僧徒各妙法を續誦し人佛供養を
更なれども殊勝みて聖衆も茲に來降し俱に供養と受りしと思ふ
許や上下の感激涙を流しける斯て大法更滞りなく果れり大天
皇光明皇后を始とす供奉の百官まで下向有都て今日の儀式は元日の礼
式と等し公卿大夫汝くの輩まで皆礼服と整て供奉し之に更なれ其

壯麗ある吏諸人ふ眼茂きまをり更なり聖徳太子佛法を弘めし
より以来各會の法式今日の如く嚴重威儀なり未有之儀小佛法敏昌の
時といふ也且現今日の導師成り菩提僧正とて南天竺の名僧なり
五臺山の文殊菩薩を拜せんと南天竺を出る大唐渡り五臺山に登
りて山中にて一人の老公羽小逢ぬ公羽が曰你何國へ行や菩提答て我
ら當山の文殊菩薩を拜んぬ登山するなりと曰われ公羽が曰文殊ハ此山
ハ不在今ハ東海の日本小純生なりと你文殊菩薩を拜せんとわ日本へ
到るなりと教へ忽ち虚空へ起去るなり菩提わられ公羽の後と禮拜し
るより下中日本へ渡んと船小乗海上を走らせける海上より大唐林邑國
の僧佛哲といふ人是由日本より入る船小く大海を渡るなり難風小遭り船を
損ひ難流み及び漂ひける小往會巨細をゆき菩提我船小佛哲と乘り

も小日本よりて船を走らせり。然るに前入寂せし行基の在る時天
平八年七月聖武天皇の奏に、貧道過去生の縁ある僧。今皇國へ入り
来りてあひて迎へ来りしを。願くは樂人を貸さるるを。願ひれむ。即ち勅
許ありて。礼部鳴臚雅樂三寮の官人。召命ありて。行基とも。其州浪
速の津。赴しめり。斯て行基。百余人の徒。弟と率ひ。樂人とも。浪速乃海
濱あり。音樂を奏し。待る所。善提佛。廿二人。船を岸に乘著。陸より
これ。行基二僧と迎へ。念答する。曰より。相識人の。即ち行基。哥と號し
て曰。靈山の親。辺の御前。契りて。真如朽せど。逢えつる。其時善
提返哥と號して曰。迦毘羅會の。契り。甲斐ありて。文珠の御。良逢
えつる。斯て行基。兩僧を同伴と都へ歸り。帝。奏し。兩僧。天顏を
拜せしめ。れむ。帝。大に歡喜し。の。二僧と。大安寺。止宿せしめ。い。行基

と。菅原寺へ歸られ。其後善提佛。哲と。菅原寺へ迎られ。先年より。菅
原寺の側の岡。一人の翁。拙く。其姓名。と。知者。なり。三年以来。言を。又。起され
む。諸人。啞の。臂。足。なる。と思ひ。然。彼。翁。折。首。と。上。て。東。の方。と。望。み。け
る。今。善提佛。哲。来りて。菅原寺へ入る。公。翁。俄。起。其。身。も。寺へ
入。善提佛。哲。と。手。と。携。て。相。語。り。時。多。く。縁。熟。せ。る。と。鑑。ひ。三。人
ひ。舞。躍。り。公。翁。は。寺。と。立。出。其。行。所。を。知。者。なり。後。公。翁。が。伏。居。る。所。を
伏。見。の。岡。と。号。け。公。翁。を。伏。見。の。翁。と。呼。ぶ。実。小。希。有。の。晴。人。なり。斯
後。小。善提佛。哲。も。小。帝。御。信。仰。ありて。兩。僧。も。小。僧。正。の。官。と。授。け。む。
々。本。朝。樂。部。の中。小。善提佛。哲。の。舞。林。邑。の。樂。ある。事。六。此。善提佛。哲。が。傳。る
所。なり。後。年。淡。路。の。廢。帝。の。天。平。寶。字。四。年。二。月。二。十。五。日。小。善提佛。僧。正。を
遷。化。せ。し。る。天。平。十。年。小。遣。唐。使。大。伴。古。呂。が。歸。朝。の。節。唐。の。揚。州。竜。興。

寺の僧鑑真来朝。多し。帝東大寺に任ぜり。此鑑真、揚州江陽縣の
産。戦國の時、名を弁士淳于髡。後、瀛州。博く経綸。涉り又医療
の術に通じ。戒律に精く。唐土より持来ると。佛舍利三十粒。阿育王
の塔様。銅支提。止觀。義文句。菩提子三斗。晋の王羲之。真行の書
一卷。亦と献上。聖武帝甚に御崇敬。鑑真を戒師とて受戒
し。一切経綸の往々誤る字を校正せり。是を能正と者
ふる。小鑑真を一切経を暗記し。悉く其誤字を正す。又諸某種
の真偽を分ち。其名を付し。小鑑真鼻を以て香と嗅。其真偽を分ち。
一品も錯り并更。光明皇后御不例の時、鑑真御茶と進めり。忽
ち強あて。御平愈。是より依て大僧正の官と授けり。是れも僧勢
煩難なるを。改めて大和尚の号と賜ひ。備前國小於て水田二百町と給り。又新

田部親王の旧宅を給りて寺院とす。今の招提寺是なり。此鑑真も天平宝字
七年五月廿五才にて遷化せられ。菩提佛。皆鑑真。皆聖武帝の御般依僧。
聖武帝天皇御却。惠美押勝。辨君。寛吏。

天平勝宝八年。太上天皇。聖武去年より御病。是れを以て。医療。及
ます。緒社の祈禱。緒寺の加持。丹誠を拙でざる方なり。且天下大赦。行れ
る。寡孤独の者。貧窮の者。老病の者。亦米銭を絶へ。賑恤。を以て。
少く御快氣の体。ふんえ。せり。又御病再發。終に密葬。五
十六才。崩御。光明皇后の御愁傷。亦も更なり。當今緒宮。方
緒臣下の悲歎。大方なり。も。有果。亦非れ。尊嚴を以て。
御葬式の禮を嚴重。和州佐保山の陵に葬り。なり。悲し。崩
御の前。御髪をわづ。御法名を満勝と号し。是帝王御剃髪。

乃如^{なり}く抑^{おさへ}此^{この}帝^{みかど}ハ^てて佛法^{ぶつぽう}を崇^{たか}び^める^{こと}由^{よし}也^{なり}。本朝^{ほんてう}ハ出生^{しゅっしん}せ^し名僧^{なそう}多^{おほ}し。所^{ところ}謂^{いは}行基^{ぎょうき}。良弁^{りょうべん}。道慈^{だうじ}。泰澄^{たいじやう}。其^{その}余^あハ^も等^らる^{こと}。違^{ちが}ふ^{こと}也^{なり}。異國^{いこく}より来朝^{らいてう}せ^し高僧^{かうそう}僧^{そう}ハ^も菩提^{ぼだい}佛^{ぶつ}哲^{てつ}。道璿^{だうせん}。鑑真^{かんじん}ハ^もなり。佛法^{ぶつぽう}中^{ちゆう}奥^{おく}の君^{きみ}と^{なり}也^{なり}。斯^{かく}て其^{その}年^{とし}も^も綜圖^{そうと}の忌^いハ^も暮^{くれ}明^{あけ}き^も也^{なり}。天平^{ていへい}勝宝^{しやうほう}九^く年^{ねん}の春^{はる}ハ^も成^{なり}る^{こと}。其^{その}正^{せい}月^{げつ}改元^{かいげん}ありて天^{てん}平^{へい}宝^{ほう}字^じ元^{げん}年^{ねん}と^{なり}早^{はや}せ^しる^{こと}。同^{どう}正^{せい}月^{げつ}ハ^も左^さ大^{だい}臣^{しん}正^{せい}一^{いつ}位^い播^は緒^{しよ}兄^{けい}卿^{けい}薨^{そう}去^され^しる^{こと}。邁^{まい}齡^{れい}七^{しち}十^{じゅう}四^し才^{さい}なり。孝^{かう}謙^{けん}天^{てん}皇^{こう}甚^とに惜^{おし}ま^せる^{こと}。以^{もつ}紀^き餘^{あま}ハ^も石^{いし}川^{がわ}豐^{ほう}人^{にん}と^{なり}遣^{つか}されて葬^{そう}祭^{さい}のま^へに嚴^{おご}し^て執行^{しやうぎん}せ^しる^{こと}。此^{この}緒^{しよ}兄^{けい}卿^{けい}ハ敏^{みん}達^{たつ}天^{てん}皇^{こう}六^{ろく}世^{せい}の孫^{そん}美^み奴^ぬ王^{わう}の子^こなり。天^{てん}性^{しやう}智^ち才^{さい}秀^{しゆ}博^{はく}學^{がく}多^{おほ}能^{のう}ある中^{ちゆう}ハ國^{こく}學^{がく}不^ふ精^{しやう}く和^わ哥^かハ妙^{めう}ハ^もして大^{だい}伴^{はん}家^け持^ぢと^{なり}も萬^{まん}葉^{えふ}集^{しふ}以^{もつ}選^{せん}まれ^しる^{こと}。緒^{しよ}兄^{けい}公^{こう}い^まも葛^{かつ}城^{じやう}王^{わう}と^{なり}ヤサ^と時^{とき}從^{じゆ}三^{さん}位^いハ^も聖^{せい}武^ぶ天^{てん}皇^{こう}の御^ご前^{ぜん}伺^き候^{こう}有^あり^し也^{なり}。帝^{みかど}緒^{しよ}兄^{けい}公^{こう}を御^ご電^{でん}遇^ぐ乃^{なり}余^あリ^しハ南^{なん}庭^{てい}の橘^{たち}の實^みを召^めきて。御^ご土^ど蓋^{がい}ハ添^{そへ}て賜^{たま}り^し。祝^{いのち}ハ^も御^ご制^{せい}系^{けい}ハ^も白^{はく}

うちむかひ実さく花さくとの葉さく枝ふ霜あたまうて常盤木
 遊あそびて橘たちばなの姓せいをど給たまはりき。されむ緒兄ゆけい公こうの御子孫みまごハ攷所くしよ橘たちばなと用もちひ
 らうとど。此人このひと井出いでの邑むら小住こすゐきう也なり井出いでの左大臣さだいじんとも称せうりき。是ハ且またあ
 當今とうこん先帝せんていの御遺勅みいしやく依よて中務卿なかつむけい道祖王みちすけのみことを以もつて皇太子すめみまふまひり
 是君このきみハ新田部親王しんでんぶのちかみの御子みまご也なり。天武帝てんむていの御孫みまごなり。然しかも其頃そのころ大納言だいなごん藤原
 仲なかつ名なとるハ武智丸ぶちまるの三男さんなん也なり。右大臣みぎだいじん豊皇成とよみかるとなりの中將姫なかつしやうひめの舎弟しやていなりき。孝謙
 天皇こうけんていの御電みでん愛あい甚しぶるを以もつて仲なかつ名な權威けんいと恣あまみ。曾そうて今人いまに親王ちかみの
 御子みまご大炊王おほひきのみこと小我女こがめと娶めとり。自みづか分の館のくわんの中うち美みくし殿宇てんうと造つくり毀やぶけ大炊王おほひきのみこと
 夫婦ふうふと任まかしめて相睦あひむくきり。何なん牟皇太子むすめみま道祖王みちすけのみことと廢あはれ大炊王おほひきのみことと儲君ちよくんと
 して己外戚おのれがうけせきの威いと逞たくままうせんものと。百般さんぱん奸計けんけいを構くへ天皇てんかう道祖王みちすけのみことの御妻みづめ
 と惡わるき女を小磯こいそ姫ひめと名なづくる。天皇てんかうを兼かへて仲なかつ名なと帳内ちやうない小近こぢづけ。御内電みうちでん在あ

すくもつ(仲)名が奏する東大となく小となく用ひひ今度の幾奏とも信
ひて太子と廢大炊王と太子小立を立言と諸臣下(勅)詔のいれむ群
臣大い發た列位負を見令と一言の幾も人なり。時仲名呂の兄右大臣豐
成堪ひて位階を進出倫言ひていども道祖王の御東先帝の御遺詔
ふく皇太子小立せのひ今させる御過ちのたれ廢ふんを思ひておどろ
さいと練奏やされども天皇敢て御許容け。遂に道祖王を廢し大炊
王と皇太子小立のひなり。是君も天武帝の御孫ひてこそせのひ。御又吉人親
王たり。後淡路の廢帝とせり。去程小天皇仲名呂と御電愛の余り余
微内相とい官と授けり。是禁廷内外の武臣と司る重任ひて其作法さか
大臣のて威勢兄豐成のよ小出者移日小増長。朝廷の公卿を慢り狂人
に。頗る我意の奉止まうられむ百官百司唾吐して仲名呂と己憎まどとい

者か。茲に攝諸兄公の嫡男小攝奈良と入り。仲名呂君富小緒り諸
臣下と茂業。忠小太子と廢とす。我意を志怒り大伴古名呂大野東人お
うひ仲名呂と討亡。前の太子道祖王を立て。帝位お即もんと商議。いふを
右大臣豐成とんきて大い發た斯て天下の強を成り。とて奈良の館に赴
對面して朝廷の得失と談。今仲名呂と誅せんとの公言あれども天皇深
く御見負あれ。御身達の後難の程も量。依て須臾此二議を延。と仲
名呂と緘りて。向後不法の動止あらう耳ひ。と省かれ。歸て仲名呂と誅
とふれ。工夫を回され。仲名呂早も奈良古九の企を申出。て大い志
即時お承内。て奈良古九東人お君を領け。道祖王と王位お進。と億謀
を企。と尾鯨を添て。練奏。とるお。天皇甚。と逆鱗。ひの仲名呂小余。と
大急お征兵。と。向。と道祖王と先。と奈良古九東人以下と。捕せ。ひ

是非の分明も及せられず、殊に其妻子徒類を皆遠嶋へ配流せしむる
と薄情なり。然るに、大臣豊成の彼輩の隠謀を知りて、疾むる公に余
其罪咎を論じ、人々皆仲大と疫病神の忌悪を其後、平
安字二年八月、孝謙天皇即位と太子大炊王を禪らせしむ。其より、孝謙帝
と高野天皇とをさぐる。高野皇ハ仲大と愛し、其変倍甚く、右大臣小任
の嘉賞を宣う。大祖大織冠鎌足より以来、世々明德を以て王家と翼輔、今
万民安寧を得、國家乱さず。良小此右大臣有由。昔伊尹有莘食乃
膳臣なり。一度成湯と佐て、遂に阿衡の号と荷ひ、呂尚ハ渭濱の遺老なり。
且文王を弼け、終に營丘の封を得。今右大臣ハ汎く民を惠の美古より
雙々、思ふ禁暴と押へ、子牙を静し、乱小勝の功あれば、其姓の中、小惠美

の二字を加へ、名と押勝と改む。姓名と藤原惠美押勝とを賜り、斯御
貝原の上、四年、小從一位を授け、太政大臣小任の、高野皇度、押勝の
宅、行幸あり、遊宴を催し、二年の秋、三公九卿と召集て、詔し、小任ハ
藤原不比等ハ其勲功天下に雙なり。且王家の外戚たるが、以て先朝、正位太
政大臣を贈られ、文忠公と謚し、官位已小極りぬ。猶足る所あれば、周の太公
の先蹤に準じ、近江國十二郡と以て封じ、淡海公と謚し、余官ハ故の如く、とあり
又押勝ハ望も小任せ、武智上呂房前も太政大臣とを贈り、小任ハ時、唐
朝ハ賊臣安祿山謀叛を起し、玄宗帝蜀の國ハ洛、唐朝大亂し、由、え
られ、朝廷ハ御評議あり、彼安祿山叛逆を討て、一旦勝利を得るとも、遂にハ
敗績し、此國の鎮西ハ襲ひ来るも、たれあも、其備を成むるを有る。と。彼吉備
大臣ハ唐土ハ兵學陣法も學ひ得るも、西戎防ぎの爲、太宰府ハ向

られ西國の海辺に要害を構へ唐船の寄来るを防禦の備を為しめられ

感夢想太后儲浴湯 改鑄新錢條

太后光明皇后天性佛道を深く信じて先帝武勳の功を以て諸國に寺
院を多し建立あり又東大寺大佛殿を造営或は施某院悲田院を建て
普く飢人病者と恤恵を以て食と衣とを施す功徳を積むに稍脚心
小我身并佛道に皈依深き者ありと。自負の想を生じしに一夜乃
御夢に殿中の空に怪しき声有て太后の佛法に皈依深きを鑄り慢
更ふれ夫供佛施僧の業を廣大に除限有と云。萬縁の佛と造り千字
の堂を建るとも。心は慢る時ハ其功德果粟の如し人の為に悲しむる時
一佛と供養一僧に布施するとも報を得て大海の如し。但し浴室常濯其
功德莫大なる更敢て余更の及と云ふあはれ。只浴湯と段けて慢心の垢を洗

ひと叫ぶと思召む忽ち夢覺あり太后御身小冷汗を流し愧恥を以
此上々夢の告ふ任に浴室を建て貴賤をえらば入湯せしめんと誓願を起
し。都の中にて地を平ら大なる浴室を造建し貴賤とも入湯を免と云
れ旨と普く世上へ觸れし猶太后御手は千人の垢を洗ひ去んと
誓言せしむれむ上皇兼當今王を首とする。諸卿も此義に余り睡くは御
更かれと思ひ止する人と練れむと云ふも太后更承引玉を以て安無比乃大
願を發し心已決せりと宣ひ毎日浴室にいらしむ。貴と賤とを人
湯する程の者の垢を至尊の御手より洗ひ去るなど入湯の諸人は余り
恐ありと辞退しなれども太后強て勸めしめし。御意に任せば難有涙と云
流し去る去程に日入湯を願ふ者絶間たり。己に九百九十九人の垢を洗はせし
今一人あき満願すると思召と云ふ一人の年老る法師の癩病人さ汚

浅猿しれ安あき入来り。入湯しるふ。全肺腐爛し膿血流き其臭れたる限
か。中く近付ぐかりけれ。太后も是は汚りた癩者ふ。忌疎るのう色を
ま。又思ふ。人の不。妻が願望。是一人。満るたれ。汚るてり
何と忌避人。やとて臭穢を堪忍ひ。癩者の背と洗ひ垢を去る。癩
病人太后。小向ひ皇后。尊れ御身。を以て。我。如きの惡病の者。小。御
成。下。し。ま。と。難有れ。我。此。業。病。を。患。る。妻。年。久。く。百。般。小。医。療。を。絶
せ。も。更。小。驗。た。り。但。或。名。医。の。中。に。人。が。此。惡。瘡。人。の。口。に。以。て。膿。血。を
吸。出。さ。む。必。と。愈。る。妻。と。得。得。と。教。示。し。て。世。の。人。我。を。疎。て。膿。を。吸
出。し。得。せ。ん。と。い。ふ。者。な。り。故。ふ。今。日。ま。で。苦。悩。を。受。け。り。や。も。恐。る。妻。あ
か。皇。后。大。慈。悲。を。垂。り。し。て。我。瘡。の。膿。血。を。吸。出。し。て。び。び。と。願。ひ。た。る。お
と。太。后。は。あ。れ。が。ふ。忌。疎。ま。せ。る。人。を。争。う。さ。る。汚。り。た。業。と。と。れ。と。思。ひ。た。る。が

又思ひ。今。の。渠。が。望。み。成。叶。は。る。と。は。世。の。人。願。満。ま。る。と。う。有。が。如。と。て
已。更。と。得。ま。る。其。を。お。任。せ。全。身。の。瘡。と。吮。ひ。膿。を。吐。頂。し。う。踵。ふ。り。迄
吸。出。し。し。て。癩。人。を。憐。れ。る。色。も。な。り。其。所。よ。此。所。よ。と。指。揮。し。て。吸。せ。し。り
噫。愉。快。の。皇。后。の。御。恤。も。て。我。多。年。の。病。瘡。ぬ。れ。と。と。怡。び。た。る。太。后。癩。人
小。向。ひ。妻。大。願。あ。り。て。你。が。癩。瘡。の。汚。穢。を。厭。ひ。望。の。と。垢。を。と。り。膿。と。吮
得。ま。る。と。穴。賢。此。妻。を。う。る。人。を。結。る。妻。多。き。と。宜。ひ。た。る。癩。人。少。願。れ。后。の
大。慈。悲。心。を。何。と。人。小。結。ひ。た。る。但。皇。后。も。阿。闍。佛。の。瘡。と。吮。ひ。と。必。と。人。小
結。ひ。と。勿。と。言。ひ。敢。て。勿。と。大。光。明。を。放。ち。今。ま。で。癩。人。と。見。え。し。妙。相
端。嚴。の。金。色。の。佛。と。化。し。靈。光。四。方。小。薰。じ。虛。空。を。臨。ん。で。起。去。り。し。る。お。と。大
后。大。小。發。た。り。し。諸。人。女。が。信。心。の。程。を。試。し。ま。り。ん。と。阿。闍。如。來。仮。小。癩。人。と。あ。り。て
影。降。さ。せ。の。ひ。たり。と。隨。喜。の。涙。と。流。し。し。大。願。成。就。せ。り。と。脚。歡。喜。淺。う。と。と

宮中へ歸らせりて。上皇當今も御物語ありけれ。けれども俱も御感悦在り。斯て浴室の地小伽藍を建立あり。阿闍寺と号し。其後太后、天平室字四年六月。御年六十才。明の則ち天和國佐保山。聖武天皇の御陵。並に葬せられ。且詔天平室字四年三月。詔命あり。本朝小錢と云く。世の交易を便むる。更已年久。公私とも益ある。更是小勝る物なり。近頃私利を貪る。旗をう。小錢を鑄。先朝の徒を犯。偽濫の錢。公の錢の半。小過。是甚。曲吏ある。俄小是を禁断せ。諸民強を擾る。有を改。新錢を鑄。旧錢と並に通用せむ。然も民損あり。小益有。則ち鑄錢司。命令られ。新錢を鑄。其新錢の文を萬年通寶といひ。一錢旧錢の十錢小當る。又銀錢の文を太平元寶といひ。此二錢新銅錢。十錢小當る。又金錢の文を開基勝寶といひ。此二錢銀

錢の十錢小當るとなり。已小新錢。世小流布。通用愈自由。万民大悦。伏し。凡錢の貸する。更其理甚。世小益あり。然も是て用。橋客の失有。錢の理。悖る時。及て其身と害する。更之なり。李彦。謂る。更あり。錢の字の旁。小。上。小。の字と著。下。小。の字と著。と。戈。八。を殺。と。器。なり。錢。中。橋。て。奈。是。を費。各。んで。遣。は。後。小。積。と。皆。却。て。其。身。と。害。する。更。之。の。人。を。害。する。と。因。て。錢。の。字。小。二。の。戈。の。字。と。用。む。と。宜。あり。其。論。錢。と。い。ふ。も。無。益。の。橋。小。費。捨。る。時。遂。小。貪。人。と。成。て。凍。餒。の。害。と。免。ま。ず。溜。る。成。善。と。の。思。ひ。て。用。む。と。亦。小。用。ひ。す。貸。絶。と。亦。小。害。と。て。貸。絶。と。徒。小。積。貯。て。半。錢。の。奴。と。れ。盜。賊。是。を。偷。奪。ん。為。小。其。人。と。害。と。錢。ハ。只。其。宜。小。從。て。用。ひ。れ。を。却。て。身。と。害。する。と。亦。小。比。噫。大。なる。錢。の。利。害。ある。更。慎。む。所。一。忍。る。所。



弓削道鏡乱宮中 惠見押勝滅亡之吏

千時天平宝字五年都大和國保良の卿小遷され百官緒民多々新都小
移り住らる。然上皇高野皇宮位を太子王小遷りひひ八名斗小て猶朝政ハ
自執行ひひ新帝の御心任せむと且又嬪配の御行迹甚じく惠見押
勝と昼夜御側侍りめ櫻がれ吏限りありとれ三公九卿中手小汗握つ
世と危しれ。時小亦一層の憂増々。其故ハ丹波國の僧小道鏡と云る者あり
其俗姓ハ弓削氏なり。此法師身小濟世の徳也。只奸弁倭才右のふて生質
世小穉なる大陰の者なり。同年の冬大内御修法の更ありて彼道鏡も衆
僧小雜りて参内し續經一々高野皇道鏡と云ひて御目小とす。彼法師と
召せと帳内入るひ一度道鏡と匡門(綉ひひて)大内御意小適ひ其より
と佛吏小吏上せて宮中お留置ひ。昔時も御側を離しむと大禪師の官を

授けのひ。御電愛限りあり。道鏡君の御電遇小縁とて身と矯(我意の
行条頗るきり。當今甚と親れた吏小忠召上皇と時御練あり。高
野皇露むも用ひか。却て新帝と疎むひ是より二帝の御中不和成
御睦む。新帝ハ旧都の平城遷幸あり。是小依て高野皇と
維憚らむ。道鏡と日夜嬉樂ひ。電愛ひ。吏甚と。世上末の者
す。軀歌と。其風説喧ら。流石高野皇も。世人の嘲り小塞ん。あ
日六年の夏法華寺へ入せひ。御落飾遊。法緯と法基と。斯
飾を落し。道鏡と嬪配の御吏と止む。且又天下の政の中。國家
の大事と賞罰の二。新帝小。せ。御心の伏小幸ひ。茲小惠
美押勝ハ是。其身入高野帝の御愛幸と蒙りて。正二位右大臣と昇
進。推威威小上越者。ち。も。采(時れ。多。小。道鏡法師上皇小咫尺

ちやうやぎやうやうとて、阿利使ひをよこす。押勝ハ君電忽ち不義、御前を
まう。登夜玉座の側へ去と阿利使ひをよこす。押勝ハ君電忽ち不義、御前を
遠避られて、権柄漸次減じ、門前車馬の音も稀く、あつた。賄賂の使者も絶
く、小成をねむ。押勝嫉妬の焰、心を焦して、大に憤怒り。斯て、八道鏡が推威お
拉し、終つて、身小害と蒙る。如何もて彼をせ法師と誅し、高野皇を押
竈我天下の権柄と掌を握らん、との心中、巧み。天平宝字八年九月、高野皇小
偽り奏し、兵を慣し、武技を簡閑と名をて。太政官の印を中下。其を以て
近國の軍兵を召集し、潛謀叛を企て、と發せんと。後黨をうき、以時節を
と、規ひたる。松小大外紀、高丘比良、大宮を兼て、押勝の隠謀、小荷擔し、
身小害の及ん、更と怖し、俄に憂心。押勝が逆謀の次第を、遂に奏聞し、
おど、高野皇大に驚き、少納言山村玉小命を急、中官院の鈴の印を
取、いさ、山村王勅命を奉り、中官院へ馳到り、鈴の印を、結取て、立出る。押

勝斯と、まう。二男、劉儒大呂を呼出、急、山村玉を、追、蒐鈴の印を奪取と命
し、を、劉儒九領堂へ、和馬小鞭を、あて、追つ。山村玉を、知り、鈴の印を奪取
我、即、食を引込、山村玉、印を奪取、と、這ひ、休、て、逃、歸り、高野皇小、
次第を奏し、され、上皇大に、逆謀存、大急、坂上、新田、名、の、又、杜、鹿、嶋
足、小、余、と、劉儒九を、伐、め、是、小、依、て、兩、將、官、軍、を、引、率、て、時、移、さ、と、劉
儒九が、即、食、押、寄、声、を、小、勅、詔、を、と、劉儒九、皇、居、を、來、れ、と、呼、け、る、是、を、
て、劉儒九、身、小、甲、冑、を、披、掛、馬、小、乗、手、の、兵、を、率、て、直、先、小、馬、戎、乘、出、。大
音、小、天子、平、城、の、内、裡、小、在、せ、。勅、命、と、六、維、命、を、と、詔、り、手、勢、小、下、知、し、
寄、兵、の、隊、小、伐、て、り、を、ね、。松、小、於、て、西、軍、を、を、て、挑、戰、ひ、る、小、坂、上、新、田、九、
拔、群、の、勇、將、を、て、ま、も、強、弓、の、積、兵、を、五、人、張、の、弓、小、當、竹、の、矢、を、番、へ
劉儒九を、ね、ひ、克、膏、て、切、て、殺、を、其、矢、過、と、劉儒九、胸、板、を、替、す、と、

射通一を何ぞ以て堪るを必ち馬より落して死せしむ。是を以て刻儒が
軍兵も周障強だ押勝が館へ逃るる。押勝刻儒が討まり由を安
大に怒り將監八田部老を大將と。兵卒百五十騎を授けて。法花寺の皇
居を襲ぐも多ふ。八田部主命と領して即時小鎧二編。馬も歩軍勢を
前後ゆ返して蒐出を。此更早くゆえを京中の強動以外外として下と
る。上皇斯と食重。紀船守も百余人の禁兵を授けて敵を追拂せ
る。船守奉り百余騎を率とり向ふ。途中中て端かく八田部と行合
る。船守氣早の武士たれ少くも猶豫なく大音小謀逆不義乃押勝を
佐る。兩賊も眼も物見人々太刀拔坪。馬戎進めて伐てり。八田部
はく馬蒐出と迎合。西陣大花を散して戦ひ。船守が武勇勝る。八田部
を一刀斬り落し。残兵散く。敗走。八分。逃行。斯て船守八坂。前

田名壯鹿嶋足本と一隊ふたり。惣勢六百余騎。押勝が館を臨み。押寄
る。押勝刻儒九八田部と討て安ら。思ふ。不意。此後。小路軍。れど
所詮防戦叶ふ。ずと。妻子。我。果。後。門。り。出。て。免。道。る。其。身。の。知。行
所。江。州。を。き。て。ど。落。行。る。是。小。依。て。徒。黨。の。軍。兵。も。押。勝。の。後。成。慕。ひ。行。あ。り
又。己。が。さ。る。落。行。あ。り。官。軍。斯。も。あ。り。押。寄。る。敵。八。早。落。る。や
空。館。わ。り。案。小。相。違。主。歸。て。り。奉。る。小。即。ち。押。勝。が。官。位。を。削
り。藤。原。の。姓。字。を。除。れ。其。館。を。破。却。器。財。雜。具。も。没。収。せ。れ。る。噫。昨。日
まで。ハ。君。竜。肩。を。襲。る。者。や。朝。位。を。進。め。々。小。官。と。増。れ。る。も。今。百。八。心。忌
悪。追。捕。の。軍。勢。と。向。ら。る。吏。君。も。臣。も。反。覆。表。裏。定。め。わ。く。淺。猿。を
一。世。の。中。よ。情。あ。る。人。を。眉。を。ひ。と。め。嗟。嘆。る。斯。て。軍。卒。亦。押。勝。が。さ。り。橋
本。を。專。り。て。磨。建。る。殿。宇。を。承。り。お。壊。ち。亂。哥。を。揚。ぐ。弛。う。る。れ。を。猶。も。押。勝

を追伐す。吉備大臣を軍師。山背守早部小太郎衛門少府佐伯伊
多智小千余騎を授けられ、西へも日頃思ふと思ひ押勝め、今院宣の下
るや奉りて大に悦び、須波年未嘗められ、遺恨と暗と此時なり。大急出
陣の用意なり。吉備公の下知、從ひ軍勢を属し、操ふとて路と急だ、田原道
より先廻り、勢田の橋を燒落し、此を張り待ひ、押勝も氣と苛て道急
だれも、落人といひ殊小女童と見果し、れを左右と道をもと、漸く勢田ま
で進著る、早橋を切落し、向ふ岸より千騎余の敵旗の手を翻し、兎の星
を輝し、雲霞の下、陣を張られ、押勝も仰天、馬へひさし、船有と尋
し、れも皆敵より切流すと覺し、舟一艘も有され、大に憫み、今公方なく
濱つゝ、弛て高嶋郡へ、王著、前少領、角定、足が宅へ、入、時長途の勞とど
休め、然る中、其夜怪星、押勝が目房の屋上、落る、其大に、獲の、是を

見者眉をひき、昔緒葛孔明の軍、常小星落て、程なく孔明先亡し、是
不吉の例なり。押勝の滅亡遠く、と軍率、力と落、拔く、小落行者多し
なり。斯て押勝、偽て道祖王の凡塩焼王と新帝と号し、已に子息、真光朝
獲、兩人を、心小三、位小叙し、其餘の輩も皆、れく小宦位を授け、日月の旗
を造りて、押三、千余騎を三隊、小分、高嶋の西の山を、後小あて、陣を張り
宜軍の二將、物部廣成、山本漆、陸より押寄、目下、部佐伯、兩將、兵船、小あ
乗て、湖水の面、小漕、並、去程、小押勝、勢、廣成、兵の押寄る、成、待て、少
時、矢軍し、頃て、兩陣、小物、とて、入、乱、追、及、て、半時、むり、攻戦、ひ、勝
敗、と、さ、所、小廣成、吉備大臣の謀針を受て、兼て、後、た、山寄の樹林、軍
兵を伏せ、れ、今、戦ひの、沙、金、とて、時、た、り、と、相國の旗と、揮、多、る、を、伏
兵、二、日、小起、り、近、辺、の、在、家、小火、と、り、喊、を、發、て、敵、の、後、より、奮、地、暗、小伐、て、

里々れ。押勝が勢思ひかけあは伏兵小撃多れ。前後の敵あはるる散
 小乱まゝ廣成得と緒勢を励。自身真先小馬成進。縦横无碍小
 斬多れ。緒卒も主将小あはるる勇を奮て捲りまゝ。押勝が陣
 いより浮足ふたり進退途を失ひ濱手敗れ。船小く乗る山路を
 落ちるも有押勝も敗る味方焼れ。濱辺へ馳行兵船小乗浅井郡塩
 津とて漕せざる小あはるる悪風吹起り。逆浪船を覆さんとする水主
 揖取大系懸た。舳舻小弛廻り身とあはるる進んまゝ。逆風吹戻れ
 て高嶋郡三尾崎へ吹着られ。是より依て押勝力なく陸へ上り隊とま
 ところ小佐伯日下部物部三野大野榎本小の官軍。各兵卒と率て押寄喊
 並發て公方より撃てくる小。押勝陣頭小馬を立新帝の層賢あると足も
 引を敵と追捲り。御感預きとて呼ひ。励く下知をうとられ。緒卒是小

励まされ。鎧袖を拘合。兎の鏝を傾けて一死族とたり。斬り射れも物もせと
 喚叫んで挑む戦ふ。官軍多勢あはるる元憤の戦ふ斬られ支度路も成
 てんえられ。真先勇んで。浪波や敵は浮足成と進む伐やと下知する時も
 藤原藏下名新兵と率て近來り。敵の横合より會釈もた斬てくる勢ひ
 猛く攻まられ。え来小勢と戦ひ疲る。押勝が勢又散る小撃多れ。敗走
 ち。押勝父子大いあはるる穢れ者の逃足る。踏留て斬撃を。鞍坪叩て下知を
 せむも耳あはるる散を官軍逃る。追て追結。或討取或生捕る
 押勝父子今拒敵叶と。方々撃破り又船小く乗て何國を當とた。湖上
 と落行をも。官軍通さる。船と陸とふも追う。遂に押勝が船と前後左
 右より圍む。さう。響結矢俱小射症れ。敵卒是矢先ふと残り少
 小射落され。押勝の矢を三筋たり射付れ。さう。石村石楯とい者船

躍て敵船へ飛乗押勝おむつと組押勝心得るやと少時ハ操合々々。矢張り弱りて
ひらひと石楠遂不組伏て首を掻く。此内官兵追く船を漕寄敵乃
船に乗移りて取高名を頭々々。押勝が男真光朝搦も。今不是までなりと
刺ちて湖水へ飛と矢張り。後ハ手ふ敵もかうり。官軍皆陸へ
上り所へ逃隠る。押勝が妻子後類と搜し出と生捕て三千人塩焼王を
も虜れどあうる。是の依て諸將凱歌と三度揚て都へ凱陣し上皇勝軍と
奏し。大い御感賞あり。諸將忠賞を給り。別て此度の勝利ハ備大
臣の軍略に依りて。官階を進り増の領地を給うる。諸生捕の者ハ悉く殊
せられ塩焼王も押勝が逆謀の同意あり。科免さう。罪せられ。押勝
首ハ大路を刳渡して梟木小肆。其三族を尋捕し皆斬罪を行れ。押勝
が弟六男ハ剛雄と僧あり。是ハ疾より佛道へ入。以て死罪を省。隠岐に

國流罪の行れ。其後先年押勝が逆謀奏依て。筑紫流罪せられ。右大
臣豊成を徵還され流刑の勅書と焼捨旧の官位を復され。范子言る更有
人富とも貪を忘さる。時ハ蝕其富を保つ。貴れも賤を忘れざる時ハ其
貴を保つ。宜ある。押勝が如きは。大の威福を極め。猶其に富貴を足り
とせ。懽奢と忘る。君臣の礼を。刺し一時の妬心より。厚に君恩を却
して謀叛を企て。身首所を異なり。三族と滅せらる。至る更是富て貪と
忘る。貴して貪を忘る者。縋つ。是ハ就ても道鏡が卑賤の身を以て君
富不辨と尊大の行条。其も行末如何有。と諸人潜小耳語合々々
新帝淡路於瀧所崩 神靈路上救難忠臣吏
逆臣押勝已不殊小伏。其二類。刑不行。後當今王も押勝が婿。在
在せ。叛逆小口息あり。疑ひ。兵部卿和氣王左兵衛督山村王外衛

の大將百濟王敬福亦官兵數百人を授け平城の旧都なる中宮院へ
むけられ俄の更なれを新帝大御所誅たあふ衣冠を整へ御違も
かく侍衛の官人も周障惑ひ逃失御側小従ひなる者も和氣王村
王詔命を噴て新帝の罪を糾帝位を削で大炊親王淡路國へ移
進せし即ち異の馬に乗ちて右衛督藤原藏下名奉行配所送
り進らせ淡路の高嶋に幽る殿造りと押筆なり素り御側事
なる女房も近臣も侍も昨日の金殿玉樓に引替て軒の板屋
漏る沖津波風御身も夜に啼る千鳥鷗の声小昔とまり御
夢も結む玉に登夜御涙を絞る未就も押勝が隠謀ハ露るも
知むと聊も御身小僻更在ぬ斯浅猿た嶋守せれ更の朽惜きと
久も憤らせのあれ心ある者といひ此爵憤を晴さと思石竊配

所を抜出の志と方と剽行の志と佐伯宿禰高屋連早も是を知ら
大御所兵士を率て追蒐る東南西北を尋搜と遂に再捕し進せ
ちも配所押筆なる緊番兵と付置る翌日配所て薨逝のけ
り実を上皇の命に依て竊ふ弑しなりと云ふ御年三十三才御在位僅
小六年年号ハ先帝繼の天平宝字と用ひれ別年号と云ふ御位を廢
淡路に流罪のひを以て淡路の廢帝と云ふ無実の虚名を蒙り
浅猿配所て崩のひを痛くする保良の都ハ已小新帝と慶
のひ高野皇重ねる宝祚を踐め是を禪德天皇とす年号と天
平神護と改元あり是皇極春明二帝と在せども二の称号ある例に依
りんと天皇再び九五の位を踐ひてより信濃鏡法師御愛幸あり太上
大臣大禪師の高官と授けの三六九卿の上と云ふ道鏡大に驕慢

心増長大臣をさる吏士のてい己不使ふ者ハ功あれも官位を進う己ハ阿
らざる者ハ罪なれも官と損一禄を減しるもど百官疫神のてい恐きて心
中ハ忌悪とも表ハ皆尊敬して這はるる天皇さ道鏡ハ法白の尊
号と賜りるを道鏡弥君電小袴リ。錦綉ハ纏られ八珍ハ飽奢移とて
極るる吏もた猶も足吏とて何事王位小昇リ天下と掌握して先祖を
耀る子孫と販さん及びあれた望ハ成りるる不敵なる此時右大臣豊
成押勝が凡たれとて右大臣と止れ下道吉備と左大臣と藤原永手を
右大臣とせしめる誠吉備大臣ハ文道武道ハ達唐土ハ博才の誉と揚
一名臣かれを孝謙天皇の侍續となり太宰府ハ学校と設け此人の功あ
始賤宦の身なり追ハ位階を進し遂ハ三公の高宦ハ登庸せられ朝
廷の朝政と佐る身となれる未例なれ立身なりる賢臣あれ道鏡

が君の威光を甲ハ彼大臣と直下王莽董卓ハ篡逆の色と含るる量
知るる時の勢ハ制する吏能と詳とよふる其成行果ハ窺
りける天平神護元年三月越智泰澄寂と越前の白山山開た各僧
たり年勝通とり僧下野國二荒山を開今日光山と稱し又和歌山と
黒髪山とより日二年大學助教膳臣大丘奏聞るる唐土の帝王を孔
子と崇めて文宣王と繼るる願ハ皇國でも其例ハ任せ孔子と文宣王
と稱し度り願ひを即ち勅許ありる是より倭國でも孔子と崇めて文
宣王とと稱する日三年正月天皇道鏡を愛し重介ハ西宮の前殿小住
しやれ百官ハ拜賀するれるる道鏡推威偏ハ帝王のてい満朝乃
群臣凜と恐る吏乳虎のてい其崇と受と皆阿リ使ハ拜趨して媚とけ
り藤原太宰府の神官阿曾六呂といふ者道鏡の意ハ脇んと飽す媚結

ひく言さる某宇佐八幡の託宣を蒙り其神託の申むれ今道鏡法皇
王位を禪りむ天下泰平やて國大の豊饒なるを御告ふいと真く
奏状を書て捧げられ道鏡大の悦び即時小天皇へ奏状の申むれを執奏
一阿曾名小の多くの金銀絹帛とをよめる天皇へ道鏡を愛するも最と
甚だしくとも王位の更ハ容易ぬ天下の一大事なれ阿曾名が奏状の
以て御議位あるも成る今應宇佐へ勅使をより上愈神託相違ぬ
於て天津日嗣を譲る事と勅詔なりぬと道鏡も理小伏しを宇佐へ
勅使とより神慮を伺せよとより天皇右大臣吉備とより宇佐へ勅使
より命下と擇む事と命より吉備公勅命と奉り退て思れ今
の勅使へ然る朝家の一大事なれ普通の者へ遣へる智勇と兼備する大
忠臣あらむと大吏と過る事と心を困る群臣の中と維彼と勘考らる

和氣清七名と智勇兼備し正直廉貞の忠臣なれ此度の勅使へ清九
如者ハ有る事とと旨と定め其由と天皇へ奏しやされぬ即ち清七名を
出され勅詔有るも太宰府の阿曾九不思議の神託を蒙りて然れも
王位を禪る事ハ吾國の一大事なれ阿曾九が表書のよても定めし神
託を疑ふハ似れも你筑紫へ下向し宇佐八幡宮へ奉幣て今應神
託を伺ひ歸る事となり清九敬んで勅命と奉り君前と退れ私宅へ歸る
其夜道鏡清九を西殿へ招れ旅行の饌別と号し山海の珍味と網の重
く御食應し其上數多の珍器重宝金銀と引出物と諸左右の女房と拂
ひ清九と近く招れ御迎此度宇佐の奉幣使より更ハ我ハ王位と譲る
や不やハ八幡宮へ伺せし所なり其心得と以て宜く神託のおもむれを回奏
せん我帝位小即ち御迎を太政大臣小執を領國ハ其望小任とより又

心得違を奏し、忽ち三族を夷ぐ。天下の政道を掌に握り、二門の殷目曰子孫の富貴を計り、九族の滅亡を招き、尸御辺に一言の中あり、依てよく分別し、面として出せしめ、或は嫌し、或は劫して討つ。縁をうけえ、清丸は鮮と承伏せ、体となし、暇を乞ひ、私室へ入り、後道鏡より得る金銀重器を唐櫃に納め、堅く封印を付、諸族表を敷正し、勢に従へ、都に啓行し、清丸は真逆の朋友、真人豊永と号す。清丸を見送り、途中別れの酒を酌み、諸謂く、武王無道の紂王を伐て天下を保し、伯夷兄弟八人はを愧く、我周の粟を食ふと、遂に首陽に餓死すと。況や神國の粟を食ふ者、於にや。彼姪僧天位、犯さむ。大丈夫者、何の面目有て、其下風を多う。其時、我、今の伯夷と号し、足下の意、奈何と言ふ。清丸微笑して、天を指し、皇天明か、日月未だ地を浴め、と。豈に慮る。吏の校ま、と言ふ。ふと、豊永大に悦び、我足

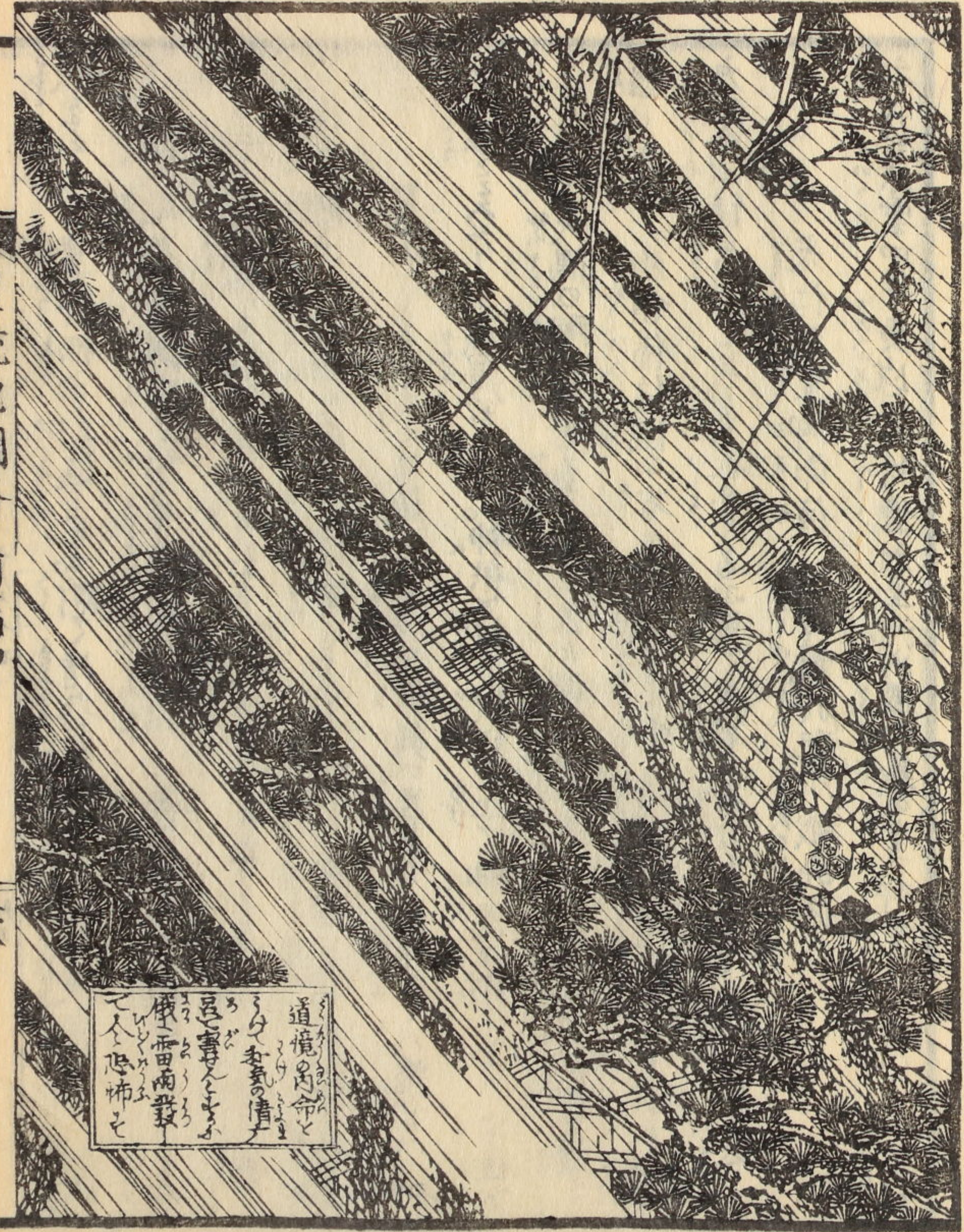
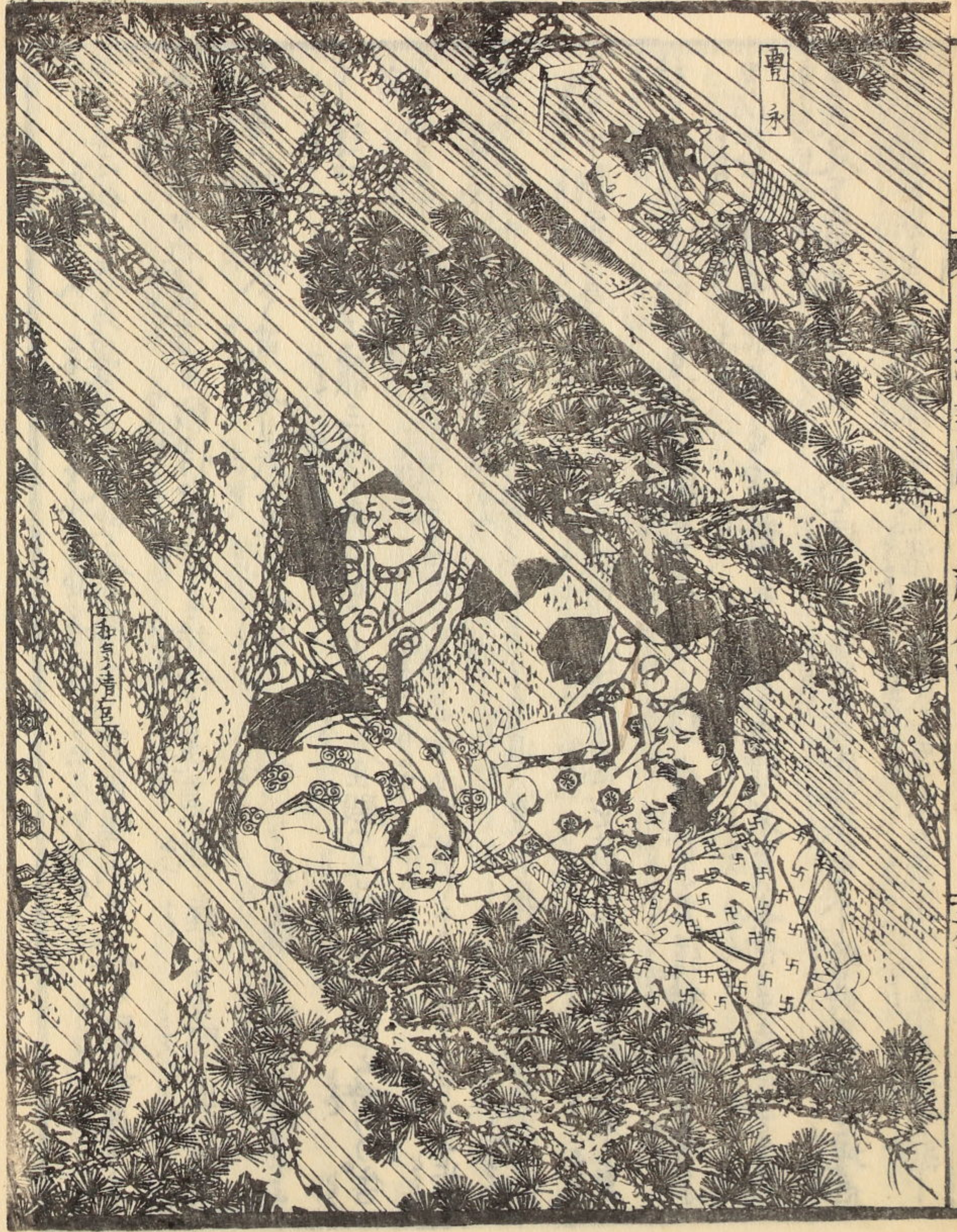
下小及むる吏使とて。拜謝とて。別々々々清丸をれり。道成急た筑紫へ下
りて。宇佐の神官の館に著し。七日間沐浴齋戒して。心神を淨め。社檀・糸織
して敬ふ。幣帛と奉り。徐小宣命と讀上。低頭平身と祈念。々々。今般の奉
幣。天下の二大吏。おていむ。俯て願ふ。正幡宮の奇瑞を著し。神託を示し。人々。丹
絨を凝して祈り。々々。八幡宮も清丸の忠誠を感納。存々。忽ち神殿鳴動し。社
檀の扉。おのげら。開た。錦の御帳垂る。内陣より金光輝れて。其光朝日の影。不
彷彿と。清丸此瑞現を拜見と。信心肝銘し。猶も拜伏して。御託宜を待する。内々
幡宮巫女小乗。移りのと。覺く。十三件ある巫女。俄小身を戦と。突立上り。其音声
悍く。凡吾皇國の天津日嗣。八神代の昔より。神孫小傳ると。々々。而て。皇統の君より
も。其行ひ。天照白太神の神慮。小遍る。時ハ王位を踐る。又吏能。いど。又賢良なり
とも。臣下の身を以て。帝祚を嗣ん。吏思ひ。ゆ。増て。況や無道姪配の妖僧。至

尊の密位を望むとや。故に神靈怒りて其祈を散ぐ。你早く帰浴と神託の旨
成偽り飾らむ有の伏し奏せよと。殿重告のふとひく。巫女喘と仆る人吏を覚
へる体なり。清丸著明る神勅を奉りて感涙の狩衣の袖を絞リ。誓首再拜
と畏り然り上る内巫女より。正氣及くる清丸八竹並きて社檀を下リ。神官の館
へ歸るとひく。頗る旅装と整へておち道路を急ぐ。歸京。私宅へ歸らむ
旅装のまゝ。衣肉にれを執奏の官人斯と奏聞や。多小依て。天皇高座小出脚
なり。是より公卿の面々相結て列座。清丸が回奏如何やと皆片漣と吞耳を
澄して聞居る。道鏡は清丸が飯浴せよとより。須波我望と達する時。節至未
せり。渠は多の引出物をとせ高宣と授けられた由や。せられを必定我々縁位有
る。よの神託なりと奏聞とせ。と空頼。錦綉羅綾の装束刷ひ金造の長衣太
刀と帶及。昇殿して御簾の左の小七室と鏤り。椅子とまかせ。堂々と腰掛り

清丸が回奏遅しと待小る。時清丸玉座小向ひ拜をりて首と擡。色成平と奏
する。八臣勅詔を奉りて宇佐八幡宮奉幣仕り神託を伺ひしより。と。忽ち社
檀鳴動。扉あつて。内陣より金光輝れ。と等く。神靈巫女小移す。と。託
し。おひきく。凡吾皇國の天津日嗣。神代の昔より皇孫小傳来り。たひ皇統乃君
なり。とも其行ひ天照白太神の神慮小適ひ。まざる時。八帝祚を嗣ひ。更然す。又
賢良なりとも臣下の身とて王位を犯さ。更思ひ。よと増て。況や無道姦配の者
小於也。故に神靈怒りて其祈を散ぐ。此旨歸浴と有の伏し奏聞せよと告む
ひ。神はうせむ。いと一言半句の涙を。かき。も憚る色を。奏聞する。小。天機甚
ふ。穩う。あむ。何吏も。且。ぞ。御簾。成。ら。と。下。と。帳内。小。入。脚。なり。多。満座の公卿身
小。冷汗を流し。互。小。面を見合。て。默然。と。是。小。依。て。堂上。堂下。鳴。と。鎮。て。音。せ。と
道鏡。大。小。怒。つ。と。眼。血。む。と。面。色。赤。く。なり。又。書。なり。大。刀。の。柄。を。確。る。許。り。小。握

齒を切り炎のうへに溜息を吐き吐き清丸の面を當と睨み。わかれ偽奴先太宰府の
 阿曾丸正に神託有る。今又うろ不肖の託宣有る。是已が作殺け偽乃
 亡女言小て信する不足む。勅命小背くといひ我を無道姫酉と罵る。余奇怪の巨癡
 うを見よ。已に五臓を劈かれ九族まで刑罰せむ。壺と躍上つて散く罵り席を
 蹴立て真殿へ入天白小勸めて急だ清丸正夫を牛裂け。妻子後類と市小
 曳出と刑戮のへと奏す。れども天皇逆鱗強く在せども。流石宇佐八幡の神慮の
 程を恐るひ死罪を免。遠嶋へ流罪小行む。勅命の余と道鏡心中小
 飽足されども力なく不肖と承知。怒氣止まらぬ清丸を穢名と改各を
 左右の脚の筋を断りて壁と。大隅の海濱へ流すと命。張典小乗て都へ出
 竊小警言固の武士小命と。路次で刺殺と。下知。是小依て武士ども
 清丸の軍輿を下吏小昇せて津の國芥河と。此所へ矢ひんと典と昇居

せ。小俄小天を曇り暴風吹大雨降出。雷電鳴閃きて。今も頭上へ落くる
 亂れ勢ひかれ武士ども戦慄して刃も拔得ず。免首成て瘡々たる所へ真金豊永
 起馬小鞭を加へ。鬼来り大言。你们清丸を過ちなく守護と配所へ送まよ
 り。途中で害ぞ。罪三族と夷ぐ。右大臣殿の生状はおありと叫り。告
 文。然らう出と續せ。されば武士ども大に恐る。命令背く。由害心を止め
 たる。不測や忽雷鳴止雨も漸くあがり。真入豊永典の内なる清丸對面
 一。足下朝家の為小其身を忘る。妖僧の逆威と恐る。直言と以て神託を奏。皇
 統を紊れ。むむる吏。誠小朝廷の大忠臣と謂つ。然小君道鏡小魂を奪れ
 る。足下と遠嶋へ配流。も吏難く余あれ。時の不肖。余何ともまじ。さもれ
 皇天足下の誠忠と照覽。も。遠くを思免の御沙汰あ。下。暫時の艱苦と堪忍
 ひて。飯洛の期を待。練められ。清丸も豊永も厚志を感謝。再會と約



道境の命と
るゝをの情
思ふ事と
雷雨殺
て人恐怖と

鉄をふちて豊永都を引返す。斯く清九危難を免れて張典の配所
乃大隅に赴く。路次たれど宇佐八幡(参詣)。一夜参詣して朝廷の安寧を祈
且我身の飯洛を願ひ多奇あるか何方よりあるか。三尺許の小蛇出ま
て清九が漸く二両脚の疵を一向に嘗る。而所の金瘡一夜の内小瘡て行歩
回の自由なり。不思議なる清九奇異の思を。是余八幡宮乃神
助依と云ふなり。感涙を流し。神供と献。祝詞を上て神恩に謝し。宇佐と
ま。遂に大隅の配所おと看ふ。然中朝臣藤原百川清九が忠節を深く
感し。其身の所領備後國に有るを其半を令て清九の配所贈り。多ふ清
九配所小諸居と云ふ。衣食も小足て萬不自由なく安寧して月を送る

光仁天皇御即位

道鏡於配所餓死條

神護景雲四年庚戌二月。称徳大皇河内國由義の宮(御幸)よりひる道鏡

何かる所存や有る異れ食物を長壽の御案なりとて天皇進めたり。小
君(御)電愛深た道鏡が献する食物の聊も疑ひむ。快けし食ひ。小
それ何となく玉體悩く。あせり。都還御在りて。朝政を聴く。更む。御
御怒次第。重らせり。いれ。医官の面く種く良方と考て。御案と献む。敢
て其驗を。近侍の女官も。近付む。只三位吉備の由利といふ臣の奏を。更
更あれ。御病林(参りて)更奏する。道鏡は昼夜天皇の御側在り。倍我
意を震ひ。多る。諸卿薄氷と踏む。恐る。危む。其年の八月。天皇終る。
崩御。乃のひる室算五十三才。前後世と知ると十六年。尊嚴と大和國添下
郡佐賀郷高野の山陵に葬り。され。時小皇太子い。定まり。玉ふ。左大
臣藤原永平。右大臣吉備緒卿と集る。何れの皇子か。帝位に即する。と
評議。あ。衆議。区く。更。二決せ。色小藤原百川藤原良経と心を

合。天智帝の御孫白壁王とて聖明の君なり。彼皇子小室位敏達継せり。人と
頻て言ふ。永年。吉備の西公実もとて。遂小白壁王と十善の帝位。小即奉
つり。是君を四十九代光仁天皇とやなる。御父天智天皇の皇子施基皇
子。御母紀穆姫とて。贈太政大臣緒人の御女なり。年号と宝龜元年と改元
し。諸光仁天皇朝政を聴り。始。坂上田馬兼て。弓削道鏡が君。竈と
甲。被て我意の行。条。号。我を深く憤り。其罪と公。なるより。帝も道鏡
が奸悪を兼て。惡。せり。又。死刑。をもと思。る。先帝の御。竈。愛。深。く
し。者。あれ。陵。の。土。い。ま。新。ある。小。刑。戮。お。行。ん。御。靈。の。憐。り。有。と。く。死。罪
一。等。と。省。し。下。野。國。流。し。系。師。寺。の。別。當。と。せ。れ。其。舍。弟。弓。削。淨。人。と。王。佐
國。禱。し。道。鏡。ハ。先。帝。の。陵。の。側。に。居。を。構。て。柶。々。と。藤。原。楓。丸。勅。命。と
奉。り。て。弛。向。ひ。宣。命。と。讀。せ。道。鏡。が。身。小。纏。し。羅。綾。の。衣。服。を。荒。け。あ。く

刷とう。木綿の衣服太布の墨衣と著せ。お中の張典ふ乗て緊く警言固の武士
 小守を配所へ送りたる。噫浅猿たる先帝御在位の内ハ権勢肩を並ずる
 者もな。橋奢王候小擬し。群臣の上ハ跋扈猛虎の羊群小在が如し。あは
 も忽ち二個の罪囚と成て同被た牢典ふ乗らま二人の従者もな。さあぐ
 飢たる犬の腹をぬるふ比糸を。緒人指し。唾吐して悪々笑ひぬ者もな。うろ
 下野國某師寺も著し。板間もとの仮屋ハ押電監率と付て嚴く
 守せ。楓九々都へど帰リたる。是より道鏡ハ別當といハ仮の名の朝々些少
 の庶食を食むる。湯水でふ思ふ。終ふ飲麦飯など。さうも花麩と尽せ
 金屋王殿小錦綉の褥と紋け。數々の女官小傳は八珎の膏味小飽し。栄花
 今ハ盧生が夢と覺て。昔と忍今と恨る。天四封の程ど哀れなり。さうも
 身とわりても猶露の命と捨り得る。九夏夏の暑日も涼風と迎る。便もな。

冬の寒夜も炉火を求る更能く凍餒辛苦なる更三年ありて終に屋の
 裡に餓死する。却統都六光仁天皇政を聴く更正しく道鏡兄弟を
 誅罪し其縁類をもれく小刑のひふ就ても和氣清九が直言の忠節を
 感あて大隅の配所より徴還され正三位大納言任じのひ重く賞禄と給り
 其誠忠成頭一のひを清九愁眉を用た大に欣悦して重く天恩とど畏り
 茲に光仁帝の御后井上皇后とや八帝の皇子おて在せ時井上内親王とや
 君の御電愛深く他戸皇子降誕一のひが君御晩年さう天位お即せのひて
 井上内親王と皇后と他戸皇子と太子おまひなる。然るに白皇后帝の御電愛
 漸く小薄き。夜の御幸枯かたせのひれを貴も賤も嫉妬ハ婦人のあひ
 づ。皇后と枕の塵乃積る恨小妬心を生ずのひ帝と御中睦くも。遂に大悪心
 と起一のひ宝龜三年夏の頃洛中洛外の神社佛閣凡咀の願文を捧て帝と

調伏する。早く崩御なせまひせ太子他戸皇子と帝位お即あせん。巧のひ
 々々を思ひ其義深く穩密なるをとり。惡吏千里と走るをひ遂に其
 吏を参議藤原百川出と大に誅た神社佛閣捧げのひと凡咀の願文
 を取集め帝(奏聞)及びこれ天皇大に逆鱗在。皇后やひ他戸太子と
 押籠のひにお死罪お行ふ。勅詔あり。左大臣永手。右大臣吉備下
 の諸大臣百般陳めたり。漸く死罪一等と思免あつ。皇后太子とも其
 位を廢して庶人なる。斯て儲君を視のひを同年八月帝群臣を徵
 集のひ何きの皇子とや皇太子おなせ。勅問あり。天皇帝ハ皇女酒人内
 親王と春宮おなせ。た睿慮中在せ。其とも宜む。群臣の議す
 ると。た汝居のひ百官座を列互其のひと見合せ。言ひ發
 する人あり。藤原百川位陞進と出て奏する。山部皇子ハ弟の皇

子とや殊小賢徳なり。また更緒人の知とらなり。況や嫡を立庶とせしや。和漢古
今とも通義あれ。彼皇子と太子とを人の理の當とていふ。とや。藤
原濱成進。出石。山部皇子。御母の素姓卑し。春宮小立。入吏如荷
あ。第二の皇子。神田皇子。太子小立。のちと奏。是より緒卿との具
肩の皇子方と勸めて評議更不決せ。百川眼と怒。齒を切て曰。太子とま
吏を徳と論じて母の貴賤を論せ。とより腹。夜物なり。古の大舜禹王を皆
賤れ。人なれ。唐堯虞舜其賤れを論せ。其徳を好て天下と禪。凡一
天の君の世嗣を定め。天下万民の爲。思愛。私の爲。と。依令。御母。素姓
貴と。其徳薄。天下の人民。伏。従。む。雖。と。俱。天下と保。つ。る。ふ。金
御母賤。とも。御身小賢徳。在。て。天下の人民。懷。れ。従。ふ。四海。太平。中。帝。祚。長。久。成
ふ。山部皇子。御嫡子。と。聰明。睿。智。小。在。せ。む。天下万民。悦。伏。と。や。何。と。御

母の素姓小拘らんやと言。暴多。其理。伏。とも。有。左。右。異。論。區。と。く。一。決
せ。れ。君。御。退。屈。在。其。目。評。議。止。し。て。入。御。か。の。ひ。多。緒。卿。皆。退
出。せ。れ。る。百。川。人。敢。て。座。を。起。む。或。人。不。審。何。と。小。退。出。せ。れ。る。と。向。か
百。川。唐。屬。主。太子の評議。天下の大事。山部皇子と太子小立。の。追。ハ。我
此。殿。中。と。固。く。退。く。依。令。不。敬。の。罪。と。唱。れ。百。川。が。命。と。徴。と。も。國。の。為。小。捨。る。命
露。れ。も。惜。と。と。て。一。す。も。動。さ。是。小。依。て。其。間。人。も。為。方。なく。捨。置。て。退。散。
る。是。より。度。く。太子の御評議。有。れ。も。猶。決。せ。と。百。川。を。始。と。山部皇子と
勸。め。て。止。む。殿。中。小。有。と。四十。余。日。其。間。晝。夜。少。も。睡。眠。せ。と。束。帶。せ。終。涼。殿。に
て。座。し。れ。む。帝。も。其。志。の。金。鉄。の。と。く。変。ぜ。ず。感。ト。ひ。て。遂。小。山部皇子。へ。主
太子の宣旨。と。下。の。ひ。と。後。小。桓。武。天皇。と。ハ。此。皇。子。か。り。噫。忠。なる。と。百。川。國。家。の
為。小。死。を。恐。ま。と。官。祿。と。ん。吏。庭。の。と。く。強。練。の。忠。節。和。漢。と。も。い。ま。例。を。聞。む。

